

母の故郷ふるさと ④

— 福永津義・人間とその仕事 —

高橋さやか

Ⅲ 開拓者（承前）

神戸はキリスト教保育の先進地、と記したけれども、さらに言うなら、キリスト教保育のみならず、日本における幼稚園教育全体からみて、神戸は一頭抜んでた地域性を誇り得るところである。神戸といわず、京都に柳池校幼稚園、大阪に愛珠幼稚園、という、日本における幼児教育の真実草分けである存在を擁する関西一円が、幼児教育の先進地、というべきかもしれない。それにしても、さきに記した、頌栄、ランバスの存在、また、望月クニの神戸幼稚園、賀川豊彦が開いた新川セツ

ルメントと連繫をもつ善隣幼稚園、ハリソン「児童研究」の訳書を以て知られる杉本春枝の六甲幼稚園、等、日本幼稚園史に顕著な足跡を印す園が、神戸には大正年間すでに確固とした実績を樹立していた。

一九二六（大正一五）年、早緑幼稚園は、神戸市須磨区磯馴町五丁目六番地（五丁目六番地は、いささかあやふやである。たしかそうだったと思うが一九四五年の空襲にあって現在はあとをとどめない。）に、ささやかな園舎を以て設立された。当時では、須磨は市街地の西端であった。といっても、更に西の一の谷、あるいは西北の方の多井畑とよばれた地域まで出ると、野や山や谷、そ

して畑地が開けていたが、須磨はともかく都会的な住宅地であった。海近い磯馴、衣掛、若宮などとよばれた町並は、比較的庶民的な中流どころの住居が多かったように覚えている。神戸の山手といえ、諏訪・六甲の山なみの中腹あたり、外人の館が多い高級住宅地であるが、須磨の場合も、北よりの山手は、大きな家が多かった。離宮道筋や、行幸町、とよばれていたところで、千鳥幼稚園というやはりキリスト教幼稚園と、もう一つこれは仏教系の太子館幼稚園というのが、その方角にあった。早緑を入れて、須磨区の幼稚園は、大正末昭和初期に、その三園であったと思う。

早緑幼稚園の保育を中心に、盾雄と津義は積極的な活動をはじめた。

園児は、設立の年は、三十名前後であったのではなかったか。三、四年たつて、六十名定員を満すようになり、やがて、若干定員を上回るほどになった。しかし、定員六十名は、一九四〇年、津義が園を譲って福岡に去るまで守っていたし、上回るといっても、三、四名以上

ではなかったと思う。

津義が母親教育に熱心であったのはさきにも述べた通りであるが、母の今の話しあいばかりでなく、地域的にもっとよびかけを広げようとして、「家と子供」という月刊パンフレットを出したりした。盾雄も津義も筆はたつ方だったといえるのであろう。子どもの問題、家庭の問題、社会問題、そして信仰——キリスト教の伝道、それらにかかわる記事をほとんど二人だけでつくり、A判58ページを原則とする活版印刷を、毎月——多分、一九二六—三一年までつづけた。もっともはじめのころは手書きのガリ刷りであった。

教会生活も熱心で（教会は盾雄の母校関西学院との関係からであったと思われる、神戸東部教会に一家中所属した）、西の端の須磨から上筒井とよばれた当時の神戸の東の端へ、日曜礼拝は勿論、婦人会、青年会（共励会）、水曜の祈禱会、土曜の奉仕活動、と、これは筆者も神戸を離れるまで、中々熱心に通ったものである。

（当然両親に従って行ったのに違いないのであるが、不

思議にも、教会で両親がどのように働いていたか、という覚えはあまりない。少年期から青年期に入るころ、筆者は筆者なりに、自分の教会生活が忙しくて、一まわりおとなのグループの集りにあまり注意を払わないでいたようである。盾雄は次第に教会復帰を願う心をもつようになったようで、一九三一年渡米、ハリウッドの日本人教会の牧師としてまず任を得た。しかし一年余で病を得、一九三三年には帰国、三五年夏病没する。結局盾雄は志多くして果し得ず、思いをのこしつつ早世した、ということになるのであろうか。よく言う厄年の——教えで四十二歳であった。しかしながら津義との共同は、常に清新で一種緊張を伴った、厳しいけれども極めて発展的な可能性をはらむものであった。そう言ってよいものではなかったらうか。津義は現実処に処して着実な一面があり、盾雄は鋭く理念的な追求をやめない、という性格をもっていた。両者相俟って、幅広く常に斬新発展的なものを開拓するいとなみが可能であったのであろう。

賀川豊彦の運動の一環に連って消費組合（現在の生協

の前駆をなすシステムをもつ）の開設にかかわった形跡があり、主力を傾注した保育内容でいえば、音感教育をそれに偏向しない形でとり入れた音楽教育、リトミックや創作舞踊も専門家の直接指導を導入して豊富な内容を盛りあげ、古事記や日本昔話の新しい解釈（民俗学的な掘り起しをとり入れ、素朴な生活的な人間性のあたたかみを大切にしたり、……「神話」や昔話を皇国主義的な枠組みの中で国家道徳昂揚の線上で公式的に捉えることをしない）による童話化、手技ではなく工作を、紙芝居ではなく絵話を、その絵話も、墨絵や水彩による掛図式の大画面（模造紙全紙）の子ども自身の創作絵話を奨揚した。当時の神戸では音楽会場として最もよい設備をもつ会場の一つ、といわれた海員会館で、園の卒園記念生活発表会を開き、それは関西一円の幼児教育に関心をもちほどの人士の間で、一応年毎に注目されるものとなつた。このような、小規模な一私立幼稚園としては多彩で実質的な、表層的ではない充実した力量感のある活動の展開は、実際問題としてはほとんど津義の実力による

が、その力は盾雄に先導されて築かれ積み重ねられた一面をもつと言うことができよう。そう言うなら四人の子女とともに、須磨早緑の保育は、盾雄と津義の所生、である。「家と子供」をはじめ、当時の資料は、一九四五年福岡の空襲の際に失われた。僅かに「幼児教育の実際」「子供心」の二つの共著と、さきにもあげた「母の面影」がのこっているだけである。津義の単著「母の面影」も含めて、逆に共著の分も含めて、実際に文を成したのはほとんど津義であったが、書を成すように構想し出版のはこびを進めたのは盾雄だったのである。自らの志において挫折したまま倒れた盾雄も、津義の仕事の開拓においては、よき半身としてのいとなみを為しつづけたことを以て、瞑したのでもあろうか。

IV 愛と信頼・感謝と希望の生活

「自発活動と自己充実誘導」「洞察」「期待効果」「系統的保育案」——これらの語を、日本語における保育用語として定着させたのは、倉橋惣三である。津義は、これ

らの語を、倉橋に学ぶと同時に、倉橋を越えてフレイベルに直結させたと見てよいと思う。倉橋は、心情的にフレイベルを敬愛しながらも、理論的にはより多くデュウイヤスタンレー・ホールを肯定していたものとうけとられる。

「自発活動と自己充実」「誘導」「洞察」……それは、フレイベルを理解し、「フレイベルによる教育」のいとなみにおいて、求めるところなすべきところを表現するのに、津義にとつてまことに適切な用語であった。

そして、「系統的保育案」を倉橋が提起すると、彼女は早速自分流の「系統的保育案」を創出した。

倉橋の「系統」は、教材（あるいは保育内容）の設定（選択）配列におけるそれであると考えられる。

津義の「系統」は、即ち、子どもの生活と成長をキリスト教教育の視点から見定めようとする、その「系統」であった。

「愛と信頼・感謝と希望の生活」は、津義の「系統的保育案」の総主題である。

プラグマティスト、といつても叱られないと思うが、倉橋の考え方は、「主題はあつてもなくてもよい」ものであつた。その点津義はまぎれもなく宗教教育家であり、アイデアリストであつた。が、津義のアイデアリズムは、極めて現実的な、生活的な展開をもつものである。

総主題Ⅱ年間主題は、期主題——第一期「愛と信頼」

第二期「感謝（奉仕）」 第三期「希望」という形で展開し、期主題からさらに月主題が展開する。

四月 「おたからっ子（愛される子ども）」

五月 「友だち」

六月 「太陽と雨（晩春の自然界）」

七・八月 「遊び場所」

九月 「ふるさと（故郷）」

十月 「わたしのからだ（身体）」

十一月 「橋」

十二月 「クリスマス」

一月 「時（昔と今）」

二月 「わたしたちの国・世界・地球」

三月 「よい子ども」

四月新入園の子どもたち、進級してそれなりに再び新しい緊張を覚えていく子どもたちに対して、「愛の中にある、愛されている自分」を自覚させようと津義は一途に考えている。園に来る前に、子どもは母の愛の中で母の愛を折にふれて実感する中で育っていたはずである。子どもは母を慕い、母を求めつづけている。それは知らず知らずの中に、母が自分を愛し、守っている実在者であることを知っていることを証しする。その母に愛され、母を愛し慕うきもちをはっきりと認識させ、園に来れば園の「先生たち」「おじさんおばさん（用務員の）たち」も、みんな、お母さんと同じように、お母さんに負けないように「あなた（園児である）」を愛している、……愛して、一所懸命「あなたたち」が大きくなる（成長する）ように、そのお手伝いをしようと待って（待機し、期待して）いる。そして、お母さん、お父さん、先

生たち、子どものことを一所懸命思っているおとなたちのことも、子どもたちひとりひとりといっしょにおとなたちみんなも、大切に守って下さる方がある。それは「神さま」……四月の主題聖句は必然的に、当然に、『神は愛である。(ヨハネ第一の手紙第四章八節)』である。

——四月、年度始めの最初の一カ月に、津義は、人間一生を貫くべき信仰の基本を据える。母の愛を期待しない、知らない子はいない。と津義は思う。神は母子に対する、神自身の代行者のちからに愛を授けられた。母は子を愛するものとして神によってつくられたものである。そうフレーベルは説き、津義は、自分自身の内部から生命の発動においてそれを肯定する。(子の側にもまた、母の愛をよび覚し一層燃焼させるちからを神は具えられたとフレーベルは説き、津義もまたそれにも共鳴する。それについては次章「母の歌・母と子の遊び」でふれることになる。)その母を保つ女・保姆は、この上なき母の協力者として、母の愛の再現者でなければならぬ。保姆は必ず子どもの登園前に園で待っていて、具えをし

て、子どもが来るのを迎える者でなければならぬ、というのは、日常保育における、そしてまた、カリキュラム構成時における、津義の厳しい態度(同労の保育者に対する)であった。そのようにして、子どもは、「愛の中にいられ」「愛されている自分」を自覚して、真実生活の場(心の安定)を獲得する。愛されている、というよるこびと安定とは、愛してくれるものへの信頼を生み出す。人間関係における信頼感があるところに、寛容と調和——共同への基盤が具えられる。

第二の月・五月、子どもたちは互いに「友だち」を見出し、もつようになるのである。「愛されている自分」の発見から「友だち」の発見へ。

そして六月、時あたかも梅雨とよばれる日本の雨期。しかし、雨のはれ間の次第に強くなりまざる陽光、繁りつづける樹木、苗代に育つ稲——やがて田植。さまざまに変化する空模様の間には虹も立つ。風の動きも度々子どもたちの注意をひくものとなる。「友だち」と遊びを發展させながら、子どもたちは、完全に自己の外なる世

界——自然界に、自己の生命を解放する。

七・八月、子どもたちは、自然界の中に、そして人間がつくり出した環境の中に、自分の場所——「遊び場所」を、自分たちの手で、自分たちの力で、見出し、築き上げ、そこで主体的な活動を展開するものとなる。

ここまでが「愛と信頼」の第一期である。

四月のはじめは、争えず自己中心である。受動的で、環境の中に自分を位置させることで先ずせい一杯である。保育者はそういう子どもたちをよく見守り、一人ひとりの彼のあり方を見定め、安定させ、できることを確認させ、自信を確認させる。

「今日から〇〇幼稚園の子どもになったのね。(中略)

明日から園にはお母さんは一しょに来ないの。お母さんがいなくて淋しいな、悲しいな、って思うひともあるかしら。悲しくなったら、泣いてもいいのよ。でも、園には先生たちがいる。お母さん……って泣かないで、先生……って泣いてね。長あく長あく泣かないで、なるべく短く、泣いてね。泣くのがすんだら、遊ぼうね。」毎年

の入園式に、「園長先生のお話」「おばあちゃん先生のお話」として、ほとんど必ず、津義がくり返したことがある。

「友だち」から「自然界」へ 五月、六月と、自己中心・受動的だった子どものある様は、対応的・能動的になり、発展的・主動的になる。容易に推察されるであろうように、四月、密着していた「母を通して、神の愛へ心をひらかれた子どもは、「友だち」との交わりにおいて人間同士の愛をみとめあい、「自然界」に心をひらいて改めて、自然律——大きな神の摂理(秩序)・力(エネルギー)……そしてその基本原則である愛——に、子どもなりの認識のいとぐちをつかむことになる。その上で、あるたしかさを培った主体性を以て、自分の場所——「遊び場所」を、そして、遊びを、創造するものになる。それはまた、生活者としての主体性の蓄積でもあるということになる。(この項つづく)

(西南女学院)